退職にあたり
「日米の文化とコミュニケーションの比較概説」

宮下和子*

はじめに～アメリカのイメージ

米国は日本にとって最も重要な国といえ，メディアで「アメリカ」という言葉を耳にしない日はないと言っても過言ではないだろう。それでは，果たして日本人は，植民地時代を含む歴史や文化をはじめとして，米国の実像を知っているであろうか。

本稿では，この「知っているようで知らないアメリカ」について，米国の文化やコミュニケーション・パターンを中心に日本との比較で概観してみたい。

１．概要～日本との比較

１）面積：日本の約 25倍　13州で独立 ⇒ 50州（ハワイ州―1959年）

アメリカの国旗は「星条旗」(Stars and Stripes)（図１）と呼ばれ，50個の星は現在の50州を表し，13本の横縞は英国から独立当時（1783年）の13州の植民地の数を表す。

50番目が1960年に州に昇格したハワイ州で，総面積は日本の約25倍である。

図１：星条旗

２）人口：日本の約2.5倍

米政府の人口調査ウエブサイトの人口時計（POP Clock）は，過去の統計を基に現時点でのアメリカと世界の人口を刻々と投影している。2012年11月29日時点では，米国の人口が約３億1,485万人で平均年齢は37歳，世界の人口が約70億5,522万人だった。また，２日前の11月27日は米国人口が約３億1,484万人，世界人口が約70億5,487万人，つまり。米国の人口は２日間で１万人増加したのである。

一方，日本の総人口（概算値）は2012年７月１日現在，１億2755万人で前年より26万人減，平均年齢は45歳である。

３）６つの標準時間帯～日本との差（ハワイを除き，夏時間は＋１，）

標準時が全国統一の日本と異なり，米国には６つの標準時がある（図２）。つまり，東の大西洋岸から，東部標準時（－14），中部標準時（－15），山岳地帯標準時（－16），太平洋標準時（－17），アラスカ標準時（－18），ハワイ標準時（－19）である。

*鹿屋体育大学国際交流センター

例えば，日本の午前９時は，東部標準時のニューヨーク市では前日の午後７時，太平洋標準時のサンフランシスコでは同日の午後４時となる。アメリカ国内を航空機で移動する際は，常に目的地の標準時を考慮することが必要になる。

さらに，米国ではハワイを除き，「夏時間」（daylight saving time）を使用し，夏季に時間を１時間進める。以前は４月第１日曜から10月最終日曜までだったが，「2005年エネルギー政策法」により，2007年より３月第２日曜日から11月第１日曜日までに延長された。

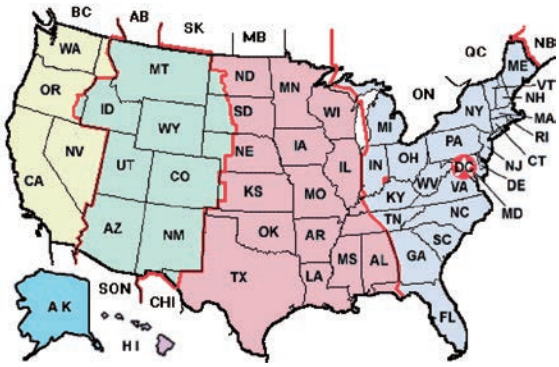

図2：標準時区分

２．矛盾から出発した共和国

１）移民の国～多様性（diversity）

米国の国章（図３）に描かれた国鳥のハクトウワシがくちばしに加えている布に刻まれている *E pluribus unum* は，ラテン語で「多数から一つへ」を意味し，米国が移民の国で，多様性からなる一国であることを表している。また，頭上の13個の星，右足のオリーブの枝の13葉，そして左足の13本の矢は，星条旗の13の縞と同様，独立時の13州を表す。オリーブは平和，矢は戦争を表すが，ハクトウワシが頭をオリーブの枝に向けているのは，「平和への願い」を表している。

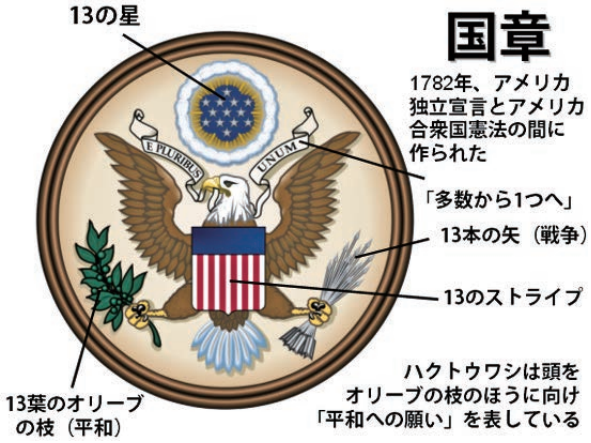

図３：米国の国章と意味

２）負の遺産と共に～アメリカ先住民と奴隷制度

次は，コロンブスの新大陸発見から米国独立までを日本と対比した略歴である。

	［アメリカ］	［日本］
1492年	コロンブス「新大陸発見」vs. 先住民	
1603年		江戸幕府
1607年	ジェイムズタウン植民地	
1619年	最初の奴隷を搬入（図４参照）	
1620年	メイフラワー号　プリマス植民地	
1636年	ハーバード大学創立（ボストン）	
1639年		鎖国令
1776年７月４日	独立宣言（13植民地）	
	独立革命（戦争）	
1783年	英国より独立，13州で建国	

コロンブスによる「新大陸発見」当時，アメリカ大陸全土には，それぞれの言語と文化を持つ先住民たちが居住していたが，入植者たちは西部開拓を進めながら彼らの土地を奪っていった。また，奴隷貿易により故郷のアフリカから引き離され奴隷船（図４）で搬送されたアフリカ人は，奴隷としてその自由を奪われた。つまり，母国英国から自由を勝ち取って独立したアメリカ合衆国は，建国当初からアメリカ先住民とアフリカ人の自由はく奪という負の遺産と共に歩んできたのである。

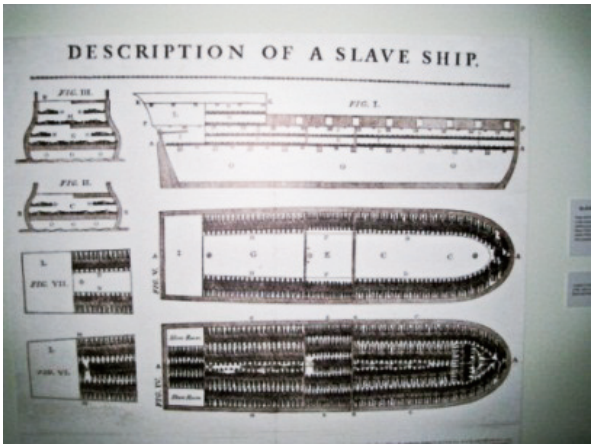

図４：奴隷船内部

３）日米交流150年と映画『ラスト・サムライ』

幕末の1853年のペリー来航以降の日米交流150年を略記してみよう。

	［アメリカ］	［日本］
1853年	ペリー艦隊来航　日本に開国要求	
1854年	「日米和親条約」	
1861-65年	南北戦争	
1868年		明治維新
1877年		西南戦争
1941年	日本軍　ハワイの真珠湾攻撃	
1945年８月	原爆投下	
	９月２日　日本敗戦：無条件降伏（戦艦ミズーリ号艦上，図６参照）	
1952年	サンフランシスコ講和条約発効（日本独立）	
2004年	「日米和親条約」より150年	

図5：アリゾナ記念館

図6：戦艦ミズーリ号

アリゾナ記念館（図５）は日本軍の真珠湾攻撃により，800キロ爆弾で撃沈した水底の戦艦アリゾナ号を横切るように作られたいわば「神社」で，石碑には攻撃で死亡した1,177名の名前が刻まれている。また，日本が1945年９月２日，東京湾上の戦艦ミズーリ号で無条件降伏書に署名した場所は船長専用の甲板（図６）で，そこに掲げられている星条旗は1853年日本に来航したペリー艦隊が使用していたものである。ミ

ズーリ号も1998年よりハワイの真珠湾に移動し，一般公開されている。つまり，真珠湾に浮かぶこの二つは太平洋戦争の「始まり」と「終わり」を象徴しているのである。

映画『ラスト・サムライ』は，日米交流150周年を迎える2004年の前年2003年に，日米両国同時に公開された。渡辺健演じる武将勝元（西郷隆盛がモデル）とトム・クルーズ演じる明治政府お抱え外国人のオルグレンとの「日米対話」が秀逸だ。

『ラスト・サムライ』の冒頭は，1876年７月４日，米国独立100周年の祝賀ムードのなか，上官の命でアメリカ先住民虐殺に関わり自分を見失ったオルグレンが，銃器販売デモ銃撃手に身をやつし，日々酒に溺れている場面である。そこに，明治政府から「官軍の軍事訓練」担当のお抱え外国人職を提供され，来日するのである。

その後，明治政府に対抗する勝元と出遭い，その村でひと冬を過ごしことになる。やがてオルグレンは，勝元の武士道観に感銘を受け，村人の素朴で規律ある暮らしぶりにアメリカ先住民の姿を重ね合わせるようになる。さらに，勝元率いる侍たちの厳しい武術鍛錬にも参加を許され，腕をあげていくうちに，本来の自分と「アメリカ魂」を取り戻していくのである。

1877年，遂に勝元軍と明治政府官軍との大決戦（つまり西南戦争）を迎える。オルグレンは帰国を取りやめ，勝元と共に戦場に赴き，決死の覚悟で闘う。そして，官軍の熾烈な集中砲火のなか力尽きた勝元の壮絶な最期を見届ける。その後，オルグレンは勝元より与え受けた刀を携え，明治天皇を訪れ，勝元の刀を捧げるのである。

その場面の明治天皇とオルグレンの英語での対話は，日米の文化を反映しながらも，二人の間に勝元の魂が息づいているようである。

明治天皇：　“Tell me how he died.”（勝元の死にざまを教えてくれ）

オルグレン：“I tell you how he lived.”（彼の生き様をお話ししましょう）

３．日本文化とアメリカ文化

日本文化とアメリカ文化について，次の４つの観点で比較してみよう。

１）甘え（dependence）　vs.　自立（independence）

	［日本］	［アメリカ］
①	親にわかってもらいたい	親を説得したい
②	上司はわかってくれない	上司を説得できない
③	「よろしくお願いします」	It’s all up to you.（あなた次第です）

1971年に出版された土居健郎著『「甘え」の構造』（弘文堂）は，代表的な日本人論の一つだが，1973年出版のその英語版のタイトルは「The Anatomy of Dependence」で，意味は「依存状態の分析」で，日本社会の「甘え」とは dependence（依存）と翻訳されている。日本語の「よろしくお願いします」という表現も，相手への依存を示唆したもので，英語通訳泣かせの表現である。

対して，植民地状態から独立を勝ち取った米国の特質は，自立（independence）であり，幼いころから，家庭で，学校で，社会で，「自立せよ！」と鼓舞されるのである。

２）集団志向（世間）vs.　個志向　（神）

［日本］	［アメリカ］
①　黙って聞く	質問するのが当たり前
②　皆と同じ	異を唱える　「自己主張」
③「制服文化」	「ふだん着文化」
④　平等主義	機会均等（人種，年齢，性差） （個のニーズに応える；入試制度等）
⑤「官」	「民」

米国で生活すると，常に「個」であることを意識させられる。日本のように苗字で呼ばれことはほとんどなく，“How are you, Kazuko?”（元気？カズコ）のように１日中何度も自分の名前を耳にする。日本では「学生」とか「子供」とか「教師」，あるいは「世間」を意識し，立場に見合った「制服」に着替えるような印象があるが，米国では自分なりの「ふだん着」でいることが求められる。

また，日本の民主主義では「平等」が優先するが，米国では「機会均等」が優先し，人種や年齢，性差などに関係なく，個々のニーズに応えるように社会のシステムが更新され続けている。例えば，大学の入試制度も日本に比べると格段に柔軟性があり，能力次第では，高校と大学を同時に卒業し，17歳で医学部や法学部などの大学院進学というケースもある。

３）過去志向 vs.　未来志向

［日本］	［アメリカ］
①　模倣	独創性
②　前例がない	パイオニア精神
③　素直，従順	チャレンジ精神
④　叱る（否定）	ほめる（肯定）

古い歴史を持つ日本は過去からの伝統やしきたり等に価値を置き，「前例がない」などの理由で，新たなことを始めるのに時間がかかる傾向がある。それ故に，そうしたしきたりに従順であることを「良し」とし，素直であることは美徳の一つとみられる。対して，米国では，建国以来，常に「動く歴史」とともにあり，パイオニア精神とチャレンジ精神に大きな価値が置かれる。

家庭や教育現場での親や教師の接し方も，日本では「叱る」という減点法になりがちだが，米国では，個々の独創性をほめ，肯定し，個性を伸ばしていく。

４）高文脈（high context）文化　vs. 低文脈（low context）文化

［日本］	［アメリカ］
①　同質性	異質性
②　本音と建て前	気持ちを伝える（本音）
③　言わなくてもわかる	言わないとわからない
④　日本語の役割小	英語を話す＝アメリカ人になる
⑤　贈り物	多様なグリーティングカード

日本は，ほぼ単一民族から成る同質性を特質とし，国民が類似した価値観を共有する高文脈文化の国の一つである。長い歴史における言外のルールもあり，言わなくてもわかる場面も多く，自己表現としての日本語の役割は微妙なものといえる。ゆえに，異文化コミュニケーションにおいては，情報不足になりがちで，異文化の人々にとっては「敷居の高い」社会となる。

対して，「移民の国」アメリカは常に異質性にさらされ，日常的に異文化コミュニケーションが展開する低文脈文化社会といえ，アメリカ人をつなぐ命綱となるのは英語になる。つまり，自分の気持ちや意見を伝えないと相手にわかってもらえない社会である。異文化の人々にとっては，英語を使い，自己表現をすることによって「仲間」になれる「敷居の低い」社会といえる。

日本では，挨拶代りに贈り物のやりとりがなされる，米国では，ありとあらゆるグリーティングカード（つまり言葉）のやり取りが，１年中なされている。

４．コミュニケーション・パターン～日本とアメリカ

日本とアメリカのコミュニケーション・パターンについて次の３点から比較しよう。

１）日本語　vs.　英語

	［日本］	［アメリカ］
①	漢字，平仮名，カタカナ	アルファベット26文字のみ
②	同音異義語（テレビ的）	複雑な音（ラジオ的
③	動詞（述語）は文末	動詞（述語）は主語の直後
	アメリカが好きです	I <u>like</u> America.
	アメリカが好きではありません	I <u>do not</u> like America.
	彼は授業に来ましたか？	<u>Did</u> he <u>come</u> to class?
	彼女はどこにいましたか？	Where <u>was</u> she?
	中国に行ったことはない	I<u>'ve never been</u> to China.
	いつ帰宅しますか？	When <u>will</u> you be home?

日本語は無数の漢字に加え，平仮名，カタカナの３種類の文字を持つが，英語はアルファベット26文字のみである。日本語のニュースを聴くとき，音声に集中するだけでは，同音異義語もあり，漢字を思い浮かべなければ意味がとれないことがある。対して，英語の場合，アルファベット26文字の多様な組み合わせとなるため，音が複雑になり，音声に集中することが重要になる。そういう意味で，日本語は「テレビ的」，英語は「ラジオ的」だといえよう。

また，日本人が英語の基礎として学ぶ５文型で明らかなように，動詞が文末に来る日本語と異なり，英語では，動詞が文頭（主語の直後）にくる。③の例文にあるように，英語では現在や過去という時制も，肯定も否定も文頭にくることになり，日本語の習慣から文末に気をとられ，質問文の文頭の単語を聞き逃してしまうと全くのお手上げ状態になる。

２）タテ社会　vs.　ヨコ社会

［日本］	［アメリカ］
日本語「タテ糸」	英語「ヨコ糸」

① 人称代名詞	
１人称：私，僕，俺	I
２人称：あなた，君，先生	常に　you
相手との関係で変わる	
「先生はどちらにお住まいですか」	Where do you live?
３人称：あの人，彼，彼女	he, she, they（機能的）
② 相手との距離を置く	相手との距離を縮める
礼儀正しさ（polite）	仲間に入れる（friendly）
よろしくお願いします	Nice to meet you.
いつもお世話になります	I've heard a lot about you.
つまらないものですが	I hope you like it.

中根千枝著『タテ社会の人間関係』（1967年）は，日本の人間関係をタテ社会と表現している。それを「タテ糸」として強固にするのが日本語の使い方で，人称代名詞をみても，「ヨコ糸」として機能する英語のシンプルさとは対照的である。①にあるように，日本語の１人称は複数あり，２人称については，英語の you の翻訳にあたる「あなた」が使用されるとは限らない。一般的には，自分より身分の高い相手にはその肩書や立場を二人称として使うのが一般的である。さらに，３人称については，英語では，自分（１人称）と相手（２人称）以外はすべて３人称として扱うが，日本語での３人称は，「彼」がボーイフレンドの意味に使われるなどの特徴がある。

さらに，②にあるように，日本社会では相手との距離を置くことが礼儀とされ，日本語表現も堅苦しいものになりがちである。対して，米国では相手との距離を縮めることが礼儀とされ，英語も相手を仲間に入れるようにフレンドリーな表現が使われる。

３）一方向　vs.　双方向（交差）

	［日本］		［アメリカ］
①	ボーリング	vs.	バレーボール
	相手の言葉を見送る		相手の言葉を受け止める
	自分のボールを投げる		言葉のボールを打ち返す
			相手がそれを打ち返す
②	教師が学生に教える		教師はコーディネーター
	「わかりましたか？」		Does it make sense?
	有能な学生　「はい」		「質問があります」
③	親が子供に指示		親は子供の自立を促す
			I'm not convinced.（納得いかない）
			移民の親は子供から学ぶ

日本でもテレビの討論番組が増加しているが，多様な議論が渦巻く米国の双方向の討論に比べると，まだ一方通行の感をぬぐえない。それは，まるで投げられたボーリングボールの行方を他のプレイヤーが眺めているのに似ている。米国の討論は，相手からのボールを必ず誰かが受け，打ち返し，さらに言葉のボー

ルが落ちないように議論と討論を重ねていくのが特徴である。米国留学時代，このやり方とスピードについていけず苦労したことが思い出される。

教育現場でも，日本では教師が教え，学生が知識を得る，というのが一般的だが，米国では，教師は学生に問題提起し，質問を鼓舞し，より深く考えるように方向づけるコーディネーターの役割をも担っている。留学時代，教師が“Did you understand?”（わかりましたか？）ではなく，“Does it make sense?”（私の説明は納得いくものでしたか）と発言した時，驚嘆すると同時に感動した。

さらに，日本人が親の世代から多くを学びながら日本人として成長することに比べ，移民の国アメリカでは，移民の親が，学校に通う子供たちから学ぶことで「アメリカ人」となっていくケースも多くある。

５．日米の異文化コミュニケーション

こうした日米の違いを乗り越え，日米の異文化コミュニケーションに貢献した４人の人物を紹介したい。

１）スティーブン・フォスター（Stephen Foster，1826-64）（図７）

フォスターはアメリカ初のプロのポピュラーソング・ライターで，若くして成功を収めながら，南北戦争中，ニューヨーク市で孤独と清貧のなか，37歳で生涯を閉じた。最初のヒット曲「オー，スザンナ」(1948年）は，同年の金鉱発見後「ゴールド・ラッシュ」にわくカリフォルニアに向かう「49人組」が替え歌で行進曲として歌い大ヒットした。1853年に来航したペリー艦隊上でも，招かれた幕府の役人たちに歌の演奏やダンスが披露されたという。

明治５年の「学制」により，音楽教育も文部省唱歌として導入されるようになり，フォスター歌も，まず1888年，「故郷の人々」（Old Folks at Home，1851年）が文部省唱歌として移入され，讃美歌としても歌われるようになる。その後，「主人は冷たき土の中に」，「ケンタッキーの我が家」，「金髪のジェニー」，「オールド・ブラック・ジョー」，「夢路より」なども移入され，日本の音楽教育に組み込まれた。

1941年から45年の太平洋戦争中は演奏禁止となるが，終戦後の1947年，戦後初のミュージカルとしてフォスターの生涯を描いた『ケンタッキーの我が家』が東京で上演された。その後も，フォスター歌は日本人の音楽教育や生活に息づき，今では日本人の心のふるさとともいえる存在である。

図７：フォスター（フォスター記念館提供）

米国では，フォスターの「故郷の人々」などが，南北戦争前の米国で最大の大衆娯楽で，顔を黒塗りにした芸人による歌やコント，ダンスからなる「ミンストレル・ショー」のために黒人訛で書かれたために，人種差別を伴うとして，特に1990年代の政治的公正な（politically correct）時代には敬遠された。

しかしながら，ピッツバーグ大学のフォスター記念館館長のルート博士などの努力により，21世紀に入り，フォスターは「アメリカの経験」として認識されるようになる。そして，フォスター死後146年後の2010年４月，初めての「フォスターシンポジウム」がピッツバーグ大学で開催され，米国の音楽学者，歴史家，クラシック歌手，カントリー歌手，音楽制作者，音楽教師などの出席者とともに，海外からは筆者一人が招聘され，日本人にとってのフォスター，つ

まり「アメリカ人の知らないフォスター」について紹介することができた。

２）中浜（ジョン）万次郎（1827-98）とペリー来航

土佐清水，中浜村の出身で幼くして父親を亡くした万次郎は，1841年１月，初漁で仲間の漁師４人と遭難する。鳥島での漂流生活143日目，米国の捕鯨船「ジョン・ハウランド号」（ホイットフィールド船長）に救助されるが，鎖国の時代，日本への帰国は許されない。14歳の万次郎は英語の覚えも早く，機転も利き，捕鯨船の名前をとり，「ジョンマン」と呼ばれるようになる。捕鯨を続けながら，立ち寄ったハワイに仲間は残り，万次郎は船長と共に米国に向かうのである。

1843年，「ジョン・ハウランド号」は母港ニューベッドフォードに帰港，万次郎は船長の故郷であるフェアヘブンで生活することになる。万次郎は，学校教育で多くを学び，その後，捕鯨船の乗組員となり，副船長にまでなる。ところが，捕鯨航海中，日本近海に接近する度に「鎖国」のため追い払われる日本の現状にふれ，やがて「日本を開国したい」と強く願うようになる。

1850年，帰国を決意した万次郎は，まず資金調達のためにカリフォルニアの金鉱で働く。その後，仲間の住むハワイに寄り，日本に向かう。1851年，万次郎は琉球に上陸し，その後薩摩を経て，長崎の奉行所に10か月足止めされ，ようやく1853年，土佐清水に帰郷を果たし，母親と再会した。奇しくも同年，ペリーが来航すると，アメリカ事情に詳しい万次郎は江戸に召喚され，「中浜万次郎」として旗本に取り立てられる。江戸幕府が，万次郎はアメリカ側につくのでは，と恐れたため，日米交渉の表舞台の通訳には抜擢されなかったものの，万次郎は日本の開国の裏舞台でその実力を発揮したのである。

1860年には，海外使節団「咸臨丸」に勝海舟や福沢諭吉等と乗船し，捕鯨船で磨いた航海術を発揮したという。また，1867年には薩摩藩に呼ばれ，開成所で航海術と英語教授を行った。

中浜家とホイットフィールド家の交流は今なお続いており，日米の草の根交流の代表的なモデルとなっている。土佐清水市はフェアヘブン及びニューベッドフォードと姉妹関係を締結し，毎年日本とアメリカに交互に「ジョン万祭り」を開催している。

３）長澤鼎（1852-1934）と「鹿児島サンタローザ友好協会」

長澤鼎（かなえ）は本名を磯永彦輔といい，1865年，英国へ密航出国した19名の薩摩藩英国留学生（通称「サツマ・スチューデント」）の一人だった。当時13歳だったため，仲間のようにロンドン大学に入学できず，グラバーの世話によりスコットランドで教育を受けた。仲間の帰国に伴い，森有礼らと共に６人で米国に渡り，ニューヨークでワイン醸造を学ぶ。その後，カリフォルニア州サンタローザへ移住，やがて葡萄王として永住する。

若き薩摩の群像（図８）の長澤鼎像（図９）は，左手に掲げる葡萄の房を見つめているが，彼が生涯をかけて醸造した「ナガサワワイン」はいまも引き継がれ，鹿児島で入手できるカリフォルニアワインとして広く知られている。

図８　若き薩摩の群像

1983年，長澤鼎が礎を築いた両都市の交流促進を目的として，「鹿

児島サンタローザ友好協会」が設立され，毎年８月，日本とアメリカ交互に若者相互交流プログラムが実施されている。2010年，サンタローザから来鹿したアメリカ人グループの女子学生とそのホストファミリー一家に鹿屋体育大学を案内し，なぎなた部の学生たちと交流してもらい，ニューズレターにも寄稿してもらった。また，昨年2012年は，アメリカ西海岸での研修とホームステイプログラムが実施されたが，鹿屋体育大学の女子学生も参加し，有意義で楽しいものであったことを話してくれた。

図９　長澤鼎像

４）マコーミック氏と「日の丸」の戦後55年

筆者は1999年９月から2000年６月まで，フルブライト研究員（通称「フルブライター」）として，米国で研究する機会を得た。前半の１月中旬までをピッツバーグ大学で研究し，後半６月までをバージニア州ウィリアムズバーグのウィリアム＆メアリー大学（以降W&M）で研究した。

2000年５月，帰国を目前にして思いがけないドラマに遭遇した。それはマコーミック夫妻（Bruce & Grace McCormick）との運命的な出会いであった。太平洋戦争中に入手した元日本兵の「日の丸」を戦後55年保存してきたという米国退役軍人については２月，耳にしていた。しかも，その旗には霧島神宮の朱印があるという（図10）。手紙と電話でようやく連絡がとれ，５月23日，夫妻がジェイムズ川対岸のサリー郡からフェリーに乗船し，私をW&Mの研究室に訪ねてこられた。

図10　霧島神宮朱印

対面後のマコーミック氏と私の対話は，回想と涙が交錯する日米戦争追体験の２時間であった。そして，薄紙に包まれた日章旗が目の前に広げられたとき，私の胸の奥が鳴った。それは古ぼけた絹で，消えかかった周囲の寄せ書き文字とは対照的に，日の丸の真紅が目にしみるように鮮やかであった。

1945年８月11日，マコーミック氏が艦内電気技師を務める「シトカ号」は，マーシャル群島からアメリカ部隊1,800名を日本侵攻のため移送中だった。ほとんどの米兵がマラリアにかかっており，特に衰弱のひどい兵士に自分の寝台を譲ったところ，感謝の印に戦場で入手した旗を渡したという。戦後初めて，1974年に来日し，米軍航空機の分解検査のため厚木基地に赴き，初めて日本の民間人と接したマコーミック氏は，彼らの真摯さに心を打たれ，「日の丸」を故郷に返したくなったという。

筆者が，自分の授業で，無条件降伏書や真珠湾攻撃の史実，原爆投下と太平洋戦争などを扱っていると伝えたときだった。「この旗は君に託すことにした（This is yours）。日本の若者の教育に役立ててほしい」とマコーミック氏は言ったのである。

翌週，筆者は夫妻の広大な敷地に建つ自宅に招かれ，一泊した。（図11）町を案内され，知人たちに紹介され，ローカルフードを味わい，マコーミック氏に取材もした。２日目，ジェイムズ川をフェリーで渡

り，私をアパートまで送り届けたときの彼の別れ際の言葉は胸を打つものであった：

「70歳を過ぎ，こんな出来事が自分の人生に起こるとは思っていなかったよ」

図11　サリー郡の自宅の夫妻

筆者の取材記事は，南日本新聞紙上（2000年６月10日）に掲載されたが，持ち主に繋がる情報は得られなかった。2001年１月，筆者は前年持ち帰った日章旗を携え，霧島神宮を参詣し，元日本兵の慰霊とマコーミック氏への謝意を祈願した。氏には電子メールと写真同封の手紙で報告した。信仰心の厚い夫妻とは，その後も手紙や電話，ご子息を介した電子メールを通して心と心の交流が続いている。

2006年８月，ハワイ大学でアメリカ研究フォーラムに参加後，筆者は，今はバージニア州チェサピーク市で，ご子息マイク家の道路向かいの家に移住されたご夫妻を訪問し，温かく迎えていただいた（図12）。専用の寝室とバスルームを準備してくださり，４泊お世話になったが，居間での交流（図13），街の観光案内（図14），最後の送別会など（図15），家族総出で歓待していただいたことは忘れられない。

マコーミック氏の別れ際の言葉はまたもや私の琴線に強く響くものだった：

「カズコがこうして訪ねてきてくれて，自分の人生が間違っていなかったことを実感できたよ」

半世紀を米国で過ごした「日の丸」を21世紀の日本に生かしていくことに，筆者はフルブライターとし

図12　孫娘の大学旗で歓迎

図13　居間の夫妻

図14　マッカーサー記念館

図15　マイク家での送別会

ての運命的な使命を感じている。今後も学内外，国内外の機会を捉えては，「マコーミック氏と旗の55年」の物語を伝え続けていきたい。

6．おわりに～日米異文化交流の展望

展望するにあたり，米国内留学生出身国の最新版の統計を見てみよう（図16）。

アメリカ国内留学生出身国　1－10位　　2012年11月12日発表					
Rank	出身国	2010/11	2011/12	2011/12%ofTotal	%Change
	世界全体	**723,277**	**764,495**	**100**	**5.7**
1	**中国**	**157,558**	**194,029**	**25.4**	**23.1**
2	インド	103,895	100,270	13.1	-3.5
3	韓国	73,351	72,295	9.5	-1.4
4	サウジアラビア	22,704	34,139	4.5	50.4
5	カナダ	27,546	26,821	3.5	-2.6
6	台湾	24,818	23,250	3	-6.3
7	**日本**	**21,290**	**19,966**	**2.6**	**-6.2**
8	ベトナム	14,888	15,572	2	4.6
9	メキシコ	13,713	13,893	1.8	1.3
10	トルコ	12,184	11,973	1.6	-1.7

図16

2012年11月現在，米国内で学ぶ世界各地からの留学生総数は約76万5000人で，前年より約６％増加している。１位は中国人の約20万人で，全体の４分の１をなし，前年より23%増加している。米国にとって中国は，人権問題をはじめとする懸案事項はありつつも，多くの意味で「有望なマーケット」であることは確かであろう。中国の後にはインド，韓国などが続くが，日本人は７位の約２万人で，前年より６％も減少したのは，一昨年の東日本大震災の影響もあろう。

次は，アメリカ人の留学先の最新版統計である（図17）。

アメリカ人の留学先　1～10位　＆　14位　　2012年11月12日発表					
Rank	留学先	2009/10	2010/11	%ofTotal	%Change
	世界全体	**270,604**	**273,996**	**100.0**	**1.3**
1	英国	32,683	33,182	12.1	1.5
2	イタリア	27,940	30,361	11.1	8.7
3	スペイン	25,411	25,965	9.5	2.2
4	フランス	17,161	17,019	6.2	-0.8
5	**中国**	**13,910**	**14,596**	**5.3**	**4.9**
6	オーストラリア	9,962	9,736	3.6	-2.3
7	ドイツ	8,551	9,018	3.3	5.5
8	コスタリカ	6,262	7,230	2.6	15.5
9	アイルランド	6,798	7,007	2.6	3.1
10	アルゼンチン	4,835	4,589	1.7	-5.1
14	日本	6,166	4,134	1.5	-33.0

図17

米国からの世界各地への留学生数は約27万4,000人で，前年より1.3%増加している。留学先は英国への約３万人を筆頭にヨーロッパ諸国が首位を占めるが，５番目に中国への約1万5,000人が続き，全体の５％を占め，前年より５％増加している。対して，日本への留学者数は，前年より33%減の5,000人弱で全体の１％にとどまっている。一昨年の東日本大震災の影響があるとはいえ，日本で学ぶアメリカ人の激減は問題視すべきことであろう。

こうした日米の人物交流の衰退を懸念し，アメリカ政府も様々なプログラムを企画し，日米交流の促進に努力している。九州では，在福岡米領事館広報部が多種多様なセミナーや講演会，コンサートなどを提供し，鹿児島でも，昨年３月にNASA（アメリカ航空宇宙局）研究員の特別講演，９月にエリック・リーコンサート，10月には日米教育委員会との共催で，鹿児島では２回目となる「米国大学・大学院留学説明会」を開催した。こうした地道な活動が日米交流を活性化することにつながると信じたい。

また，若者や学生に限らず，年齢に関係なく，機会をとらえ，思い切って米国の直接体験をお勧めしたい。2010年10月，放送大学鹿児島学習センターでは，全国初の海外での面接授業（スクーリング）をシアトルのベレビュー大学で実施した。筆者の友人が教鞭をとる大学だが，全国から集った20代から80代までの受講生を対象に準備された５日間の特別プログラムには，ガウンを身に着けた卒業式とレセプションまで準備されていた。そうした心のこもった配慮に感謝するとともに，米国の大学の柔軟性と懐の深さを改めて強く認識することができた。

さあ，あなたも，日米の異文化コミュニケーションに一歩，足を踏み出してみませんか。

図18　ホテル着後　集合写真